

ねじくり博士

幸田露伴

青空文庫

当世の大博士にねじくり先生というがあり。中々の豪傑、古今東西の書を読みつくして大悟したる大哲学者と皆人恐れ入りて閉口せり。一日某新聞社員と名刺に肩書のある男尋ね来り、室に入りて挨拶するや否、早速、先生の御高説をちと伺いたし、と新聞屋の悪い癖で無暗に「人を食物にする」会話を仕出す。ところが大哲学者もとより御人好の質なれば得意になつて鼻をククンいわせながら饒舌り出す。どうも凡人は困りますよ、社会を直線づくめに仕たがるのには困るよ。チト宇宙の真理を見ればよいのサ。政事家は政事家で、自己の議論を実行して世界を画一のものにしよふんという馬鹿氣ているのが有るし。文人は文人で自己流の文章を尺度にしてキチンと文体を定めたがツたり、実に馬鹿馬鹿しい想像をもっているのが多いから情ないのサ。親父は親父の了簡で家をキチンと治めたがり、息子は息子の了簡で世を渡りたがるのだからね。自己が大能力があつたら乱雑の世界を整頓してやろうなんかんというのが当世の薄ら生意氣の紳士の欲望だが、そんなつまらない事が出来るものカネ。天地は重箱の中を附木で境つたようになつてたまるものか。兎角コチンコチンコセコセとした奴らは市区改正の話しを聞くと直に日本が四角の国でないから残念だなどと馬鹿馬鹿しい事を考えるのサ。白痴が羊羹を切るように世界の事が料

理されてたまるものか。元来古今を貫ぬく真理を知らないから困るのサ、僕が大真理を唱えて万世の煩惱を洗ッてやろうというのも此奴らのためサ。マア聞き玉え真理を話すから迂濶に聞ていてはいけないよ、真理を發揮してやるから。僕は実に天地の機微を觀破したのサ。中々安くない論サ。チンダルから昨日手紙をよこして是非来年は拜聴に上るといのサ。そのくらいの訳だから日本人に分るような浅薄ナ論じゃアない。ダガネ、論をする前に君に教えておく事があるのサ。いいかえ、臆えて置玉え、妙な理屈だぜ。マアこうサ。第一、人間というものは愚なものだ、という事は承知するだろう。その愚なものに好と思われる論は愚論サ。僕の論は平常の人にはきつと悪くいわれるよ。ダカラ愚論でないのサ。愚論でないから分らないのサ。人間に分るような浅薄の議論は仕方がないのサ。人間に分らないくらい高尚幽玄の論だから氣を静めて聞玉えよ。よしカネ、まず我輩が宇宙を貫ぬく大真理を発見した履歴を話そうよ。僕がネ幼少の時にフト感じた事があるのサ。実にネ、大發明というものはつまらない所から起るもので、僕の大真理は道から出たのサ。僕が田舎に居て小学校へ通う時分にネ、草の茂ツた広い野を一ツ越して行くのサ。毎日毎日通学するのだがネ。爰に或朝偶然大真理を発見する種になる事に出逢ツたのサ。ちようど或朝少し後れて家を出たが、時間が例より後れたから駈出したのサ。所が何も障害物のない広

い野だのに、道が真直についていないのサ。道が真直についていれば早く到着するのだのにサ。君も知っているだろう、二点の間の最も近きは直線なりという訳サ。所がヒニクに道路が曲りくねツてついているのサ。爰だテ、なぜ道が曲ツてついているのだろう。これを研究したならば誰も真理を發明するのサ。余程面白い事だぜ、君も試に考えて見玉え。これが大真理だよ。中々分るまい。どうだ爰だよ、僕の新發明は。

僕はそれからなぜだか分らないから頻りに宇宙を見たのサ、道は曲ツてついている、真直にすれば近いものを態と迂曲て人のあるく所が妙じやないか。そこで僕はなぜねじれてくるのだろうかとおもツたが、不思議なもので皆ねじれてるよ天地のことは。イイカネ、ソコデ今日僕が發明したのは「ねじねじは宇宙の大法なり」という真理サ。妙なものだよ、マア聞玉え。即ちスパイラルシステムというのサ、螺線サ螺線サ、天地は螺線的なのサ、古今の愚人どもがこの螺線法を知らないから困るのサ。まず手近に例を取て見せようか。犬の尻尾は即ち螺線なのサ。君の頭に生えている毛は螺線に生えてるのサ。イイカネ、螺線の類は非常に多いがネ、第一は直線的有則螺線サ、これは玩弄の鉄砲の中にある蛇腹のよくな奴サ、第二は曲線的有則螺線サ、これはつまり第一の奴をまげたのと同じことサ、第

三は級数的螺線サ、これは螺線のマワリが段々と大きくなる奴サ、第四は不規則螺線サ、此奴が実にむずかしいのだ、メチャメチャに蚯蚓みみずの搦み合たようの奴だ、まだこの外に大變に螺線の類があるのサ、詳しくいえば二十八通りの螺線があるよ、尚詳しくいえば四万八千ぐらいあるのだがネ、君が幾何学的思想に富んでいれば直しきに分るのサ。どうもマセマチカルギリシヤの考えの薄い人は中々奥妙の理を急に会得する事が難かたいよ。ダカラ希臘ギリシヤの哲學者はまず哲学を学ぶ前に数学をやれと弟子達に教たのだよ。この頃世間に哲学臭い事をいう奴が多いが、叩いて見ると皆数学思想が薄弱だから困るよ。これは日本支那の通弊サ、学的觀念が発達しない人間は馬鹿馬鹿しい事を考えるものだよ。論理学なんぞは学ぶに足らないのサ、数学で沢山サ。イイカネ、「物は或勢力より追やらるる時は螺線的にすすむ」というのが真理だよ、この真理を君に実例で示そうか。吹矢の筒に紙の小さい片きれを入れて吹いて見玉え、その紙は必らずぐるぐる回りながら飛出すよ。水の中に石を落して見玉え、これもぐるぐるまわりながら沈むよ。穴から水を出して見玉え、その水はきつとねじれて出るよ。これも螺線サ。矢は螺線になつて飛ぶから真直に行くのだよ。鉄砲の玉も螺旋らせんして飛ぶのサ。筒の中に螺線条をこの頃施すのもこの規則に従うのサ。鳶とびの尾は螺線を空中に描いて飛ぶのサ。魚の尾も螺線をなすのサ。鶴が高く登るのにも空中を輪になつてぐ

るぐると翔りながら飛ぶのサ。是非ねじれて進むのサ、真直に進むものはないよ。地球も
 自転しながら進むのだからつまり空間に螺旋しているのだよ。太陽も自転している以上は
 たしかに螺旋して進んでいるのだよ。月も螺旋しているのサ。星もその通りサ。螺旋螺旋
 なんといいのは好い新熟字だろう。人間のつむじを見ればこれも螺旋法で毛が出るのサ。
 血は血管の中で螺旋して流れているのだよ。酒樽の口から酒は螺旋して出るよ。腸は即ち
 螺旋をなしてるのサ。川はやや平面的に螺旋をなして流れる。山脈は螺旋さ。木の枝は一
 つが東に向って生える、その上の枝は南それから西北という工合に螺旋している。花を能
 く見玉え、必らず螺旋に花びらが出ている。朝顔の花の咲かない間は即ち渦をなしている。
 釘も螺旋状の釘が良いのサ。コロック抜きも螺旋をなしているから能く突込めるのだよ。
 道路は即ち螺旋状を平面にしたようにしているものだよ。事々物々皆螺旋サ。波線で世界
 を解釈しても解釈が出来るよ、螺旋を見つづしにすれば即ち波線だよ、波線螺旋渦線皆曲
 線より成るものサ、その曲線だらけで出来ているものが良いのサ、強いものサ。尚不思議奇
 々妙々なのは、植物の芋の蔓でもムカゴの蔓でも皆螺旋すると同じく、礦物の蔓もその実
 は螺旋的になつてゐるのだが、但し噴火山作用でメチャメチャになつて分らないのサ。火
 も螺旋になつて燃えるのだが凡眼では見えないのサ。風は年中螺旋に吹てるのサ。小サイ

奴が颶風つむじだよ。だから颶風などは恐ろしいものではない。推算が上手になれば人間にもつとも幸福を与うるものは颶風だよ。颶風などを恐れる世界だから悲しいよ。それで物理学者でござるというのが有る世間だからネ。浪は螺旋をなして巻き巻き進むのだよ。まだ沢山例はある、さてこれからがいよいよ奇だよ。

物は或勢力に逐おいやらるる時は螺旋的運動をするという真理は、すでに充分に分つたろう。これは中々争うことの出来ない真理さ。しかも物理学上の明晰なる理だよ。イイカネ、例に挙げたものを能く能く考えて貰いたいのサ。ひとつもこの原則に撞着矛盾するものはない。ソコデ何故に物はかく螺旋的運動をするのだというのが是非起る大疑問サ。僕がこの疑問に向ツて与うる説明は易々たるものだよ。曰いわくサ、「最も障碍しょうげの少き運動の道は必ずらず螺旋的なり」というので沢山サ。一体運動の法則を論じて見れば一点より他点までに移る最近径は前にもいつた通り直線に極きまつてるのサ。ダガ物は直線に進まないよ。直線に進まないのではないが、螺旋をして行く場合には直線にも進むが即ち前にもいつた所の直線的有則螺旋サ。分つたかネ。たとえば矢が弦を離れてからぐるぐると風を切てまわりながら直線に進む所が近い例サ。あれは即ち直線的に螺旋線を空中に描いてるのだよ。あの

矢の鏃ねをいろいろに工夫するのだがネ、どうしても雁かりまた股はよくいかない。何故というのに雁股は僕の所謂いわゆる最も障碍の少きは螺旋的運動なりという原則に反対しているからだ。矢が能く飛ぶには色々の原因もあるがまず第一に螺旋規則に従うからだよ。さて以上二ヶ条の原則を出したが、まだ中々こんな事ではつまらない。もつと不思議な事があるよ、動力学と静力学を君が知っていると、もつと早く分らせることが出来るがネ。早くいつて見れば空漠として広い虚空こくうの中に草の蔓は何故無法に自由自在に勝手に這い回らないのだろう。ソコニハ自然の約束があるから即ち一定の有様をなして、左り巻なら左り巻、右巻ならば右巻でちゃんと螺旋をなして這いまわるのだ。虚空に抵抗物は少いのだが斯かくなるこの自然の約束を万物の上から観破して僕は螺旋が運動の妙則だと察したよ。サア話しが段々煮えて来た、ここへ香料やくみを落して一ト花さかせる所だ。マア聞玉え、十二聞ていると、ソウカよしよし。ここで万物死生の大論を担ぎ出さなけりやならないが、実は新聞なんぞにかけるような小さな話しではなし一朝一夕の座談に尽る事ではないから、少しチョツピリにしておくよ。一体死とはなんだ、僕は世界に死というような愚を極めた言語があるのが癪しゃくにさわる。馬鹿馬鹿しい死の定義を立てて断言することの出来る豪傑があるか。ナンノつまらない、死という言葉は千年もたてば字引の中になくなるべき言語だよ。十二驚くには

足りない、極りきつた論サ。死は休なりとか、死は静なりとか、死は動力の不存在なりとか、死は自營的機能の力が滅して他の勢力のみ働らく場合なりとか、色々の理屈をつける奴もあるが、第一困る事には死という事は世界にひとつもない。君だつて死にはしない。僕だつて死にはしない。関羽だつてまだ生きているよ。仙人にならなくつても生きていますよ。虫だつて中々に死ぬものはない。この世界は活世界だぞ。いつでも勢力が漲みなぎつている天地だ。太陽が躰びきをかいて寐ねたためしはない。月も星も山も川もなんでも動いていないものはない。凡眼で静かだと思ふ石だつて、常に破れかかるか変りかかっているくらいのものだ。その世界の中に死なんという馬鹿馬鹿しい事があるものか。蚕まが死ぬ、ナニ死ぬではないひひる。蛾ひひるになつて生きているよ。蛾が死ぬ、ナニ蝶になつて生きているよ、蝶が死ぬ、ナニ死にはしない、必ず何かになつて生きているよ。一体マア生きているという事が気の毒ながら凡眼家には分らないだろうがネ。此所ここが実に嬉しいところサ。植物も生きています。動物も生きています。実は植物も動物もおなじものサ。婦人の手が触れると喜ぶなんかんと、いう洒落た助倍すけべいの木もある。御辞宜おじぎを能くする卑劣の樹もある。這つて歩いて十年たてば旅行いたし候と留守宅へ札を残すような行脚の樹もある。動物の中でもなまけた奴は樹に劣つてる。樹男という野暮は即ちこれさ。元より羊は草にひとしく、海ほおずきは蛙かわずと

同じサ、動植物無區別論に極ツてるよ。さてそれから螺旋でこの生物を論ずると死生の大法が分るから、いよいよ大発明の大哲学サ、しツかりしてきかないと分らないよ。

一体全体何んでもドンゾコまで分ツてる世界ではない。人間の智慧でドンゾコまで分るものだからどうか知れないのサ。人間の智慧という奴が無限だから有限だかも人間の智慧では分らないから可笑いおかしのだよ。人間の智慧が無限ならば事物を解釈し悉つくせるように思うだろうがこれもあやしいのサ。気の毒だけれども誰も人智の有限と無限とを智慧の上から推して断定のできるものはまず無さそうだ。そのくらいの事だからまず動物と植物の區別さえろくにはつかないのサ。それから生物と死物との區別だツてろくに付けることの出来るものはまず無いのサ。生物の最下等の奴になるとなんだか口クに分らないのサ、ダツテ石と人間とは一いっしょ所しょにならないには極ツてるが、最下等生物の形状はあんまり無生活物とちがいはしないのだよ。所を僕のねじねじ論で觀念すると能よく分るよ、但しあんまり能く分らない所が少し洒落しやれている所だとおもい玉え。僕にいわせると「發生の機は螺旋的運動にある」というのサ。なんでも物の發生するというのは君も知ツている通り「力」の所為サ。その力で逐いやらるるものは則ち先にいうた原則で必らず螺旋的に動くのサ。ソコでこの

螺旋的運動は力のある限りは続くのだ。何故螺旋的運動をするかというに、世界は元来、なんでも力の順逆で成立ッているのだから、東へ向いて進む力と、西に向て進む力、又は上向と下向、というようにいつでも二力の衝突があるが、その二力の衝突調和という事は是非直線的では出来ないものに極ツてるのサ。所で互に曲線的になるのだよ。曲線的ならば衝突してもよいのサ。何故というに、一直線上で同量の二力が衝突する時はともに無となつて仕舞^{しま}うが、曲線上で衝突する時は中々無になる場合は少い、又直線的で反対の力が互に衝突する時は反射して走しる力の有様が曲線的に反対の力が来て互に撞^{ぶつ}着^かる時よりもしろくない。直線は一種直線ぎりだが、曲線はいろいろの度を無窮の多数に有している、有則曲線、無則曲線、実に人間には分らないほど色々の曲線がある。たとえば有則の曲線の場合でいおうか。ここに仮定した二点があるとして、二点を貫く曲線をブンマワシで書いて見玉え、またそのブンマワシの心を動かして同くその二点を貫く曲線を書いて見玉え、又そのブンマワシの心を動かして書いて見玉え、有則の曲線が無数に書けるよ、実にその相互に異つたる状態を有せる曲線の即ち弧という奴の数は何箇^{いく}あるか知れない。まして人間の指で書くような出鱈^{でたらめ}目の曲線は何千万状あるか知れるものではない。このくらい曲線という奴は洒落た奴だよ。だから二力が互に異りたる曲線的に来てぶつかる時は、又何千万様

の変化を起すか知れないのサ。ここが即ちおもしろい所だ。ここから天地万物がメチャメ
 チャに色々の形状をなしてあらわれて来るのだよ。さてその曲線という奴は無障碍の空間
 で試みに引のぼして見玉え、必ず螺旋線となるには相違ないのサ。螺旋線にならなければ環を
 なすのだよ、環をなしてはつまらないのサ。去年の道をまた今年もあるいているようなも
 のだから、即ち変化生々の大法に反対している。十二環をなす気づかいはないのサ。地球
 の軌道は楕円の環をなしていると君達は思うだろうが大ちがいサ、実は月が地球のまわり
 を環をなしながら到底は^{つまり}大空間に有則螺旋線を描いていると同じ事に、地球も太陽に従って有
 則螺旋線を大空間に描いているのサ。即ち自転も螺旋サ。又一年の動きも螺旋サ。有則螺旋
 を浅薄な考えで見ると環に見えるのサ。イイカネ、いよいよむずかしくなつて来たから中
 々分るまい。マアしかしこのくらい分らなければ後は中々分らないよ。前からいつて来た
 通り活動の世界だからネ、どうしても螺旋的の運動に違いないのサ。^{ひつきょう}畢 竟は螺旋的だ
 から運動が千殊万差の異様をなして長く続くのサ。ソコデ人間の世界に生れて来るのも単
 に螺旋的にヒヨコリと出て来るのサ、そうして人間の意思動作もすべて螺旋的にぐるぐる
 まわっているのサ。社会の栄枯盛衰も螺旋的にぐるぐるまわっているのだよ。易なんぞと
 いうものは感心な奴で、^{しよこう}初 爻と上 爻とが首尾相呼んでぐるぐるとデングリカエシをやッ

て螺線を描いて六十四卦けだけにコロガリころがって実はまだいくらにでもコロガリ出すことが出来るのサ。ダカラ甘うまく天地を包含したよ様の事を示せるのサ。又人間の心をもイヤに西洋の奴らは直線的に解剖したがるから、呆れて物がいえな、馬鹿馬鹿しい折詰すの酔す子しみたよ様な心理学になるのサ。一切生活機能のあるもの、いい直して見れば力の行われれているものを直線的にぐずぐず論ずるのが古来の大まちがいサ。アア螺旋法なるかななるかな。といたるまま、かの学者はクンクンと鼻をならしながら、どうだ分つたか螺旋法が、少し分つたろう、螺旋法に限るぞ、といい玉たまう。かの男は閉口してつくづく感心し、なるほどなるほど法螺ほらとはこれよりはじまりけるカネ。(終)

〔読売新聞〕 明治二三年)

青空文庫情報

底本：「懐かしい未来——甦る明治・大正・昭和の未来小説」中央公論新社

2001（平成13）年6月10日初版発行

底本の親本：「読売新聞」読売新聞社

1890（明治23）年4月

初出：「読売新聞」読売新聞社

1890（明治23）年4月

※この作品は、1890（明治23）年4月8日～4月20日にかけて「読売新聞」に連載された、「日ぐらし物語」の一話です。

入力：川山隆

校正：伊藤時也

2006年10月18日作成

2007年2月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ねじくり博士

幸田露伴

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>